

主の祈り

2015年1月11日

おはようございます。今日は、聖書で一番よく知られた祈りについてお話したいと思います。「主の祈り」と呼ばれる聖書箇所をご存じの方はいらっしゃるでしょうか。多くの教会では、この箇所を毎週の日曜礼拝で暗誦します。私たちが行っていた日本の教会でもそのようにしていました。この祈りは皆に親しまれているわけではありません。こんなお話があります。ある日、二人の男性が散歩していました。ひとりの人はけっこういい人です。毎週教会に行き、なかなか信仰深いようです。彼の友だちが言いました。「そんなに信心深いなら、主の祈りをそらで言ってよ。きっとできないさ。10ドル賭けてもいいよ。」彼は「いいよ」と答えると言いました。「これから私は眠ります。神様、たましいお守りください。もし目覚める前に死ぬのなら、神様、たましいお手元に」友だちは「すごいね。できるとは思わなかったよ」と感心し、彼に10ドルを手渡しました。この男性は、子どものころに教えられた祈りを暗誦しました。この祈りは18世紀ごろから寝る前の祈りとして親しまれており、クリスチャンでない人たちも就寝前にこう祈ることがあります。この男性はこれを主の祈りと間違ったのです。けれども友だちもそれが間違いだと気づかなかったので、男性は主の祈りを覚えているのだと勘違いしました。

主の祈りは聖書の中のふたつの箇所に登場します。多くの方がよく知っているのは、マタイ 6:9-13 です。もうひとつはルカ 11:1-4 です。今日はこのルカの箇所を見ていきましょう。では、読みます。「11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」 11:2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。 11:3 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。 11:4 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』」

あることについて知りたいけれど、それについてまったく知らないという場合、専門家に聞くのがよいでしょう。けれども、自称専門家という場合もあるので、気をつけなければなりません。

ビリー・バークは、オズの魔法使いで北の良い魔女グリンダを演じた女優です。バークが大西洋を渡る船旅をしていたときのことで。あるとき、となりのテーブルに座る男性がひどい風邪をひいていることに気がつきました。彼女は男性に尋ねました。「ご気分が悪いのですか。」男性はうなずいて、具合の悪いことを伝えました。彼女はこう続けました。「ではこうしてください。部屋に戻ってオレンジジュースをたくさん飲んで、アスピリンを2錠飲んでください。毛布をかぶってできるだけ暖かくし、汗をかいてください。私の言うことに間違いはありません。私はハリウッド女優のビリー・バークです。」すると男性は笑顔でこう答えました。「ありがとうございます。私はメイヨー・クリニックのメイヨー医師です。」メイヨー・クリニックとは、メイヨー医師が設立したアメリカの一流総合病院です。メイヨー医師は、自称専門家から風邪の治療法を教えてもらう必要はありませんでした。風邪のときどうすればよいか、ちゃんとわかっていたからです。

弟子たちには専門家が必要でした。彼らはイエスと多くの時間をともに過ごし、イエスが時間をたっぷりかけて祈っていることに気づきました。イエスはひとりになって祈られました。ときには、弟子たちを伴って祈られることもありました。十字架にかかれる直前には、一緒に祈りなさいと弟子たちを招かれました。今日の個所の1節で、弟子たちは祈り方を知りたかったので、イエスのもとにやって来て、祈り方を教えてくださいとイエスに願いました。その様子が目に浮かぶようです。ある日イエスが弟子たちといます。弟子たちは誰がイエスに祈り方を教えてくださいと言うかお互いに話し合っています。もしかすると、ペテロがヤコブの肩をたたいて、聞きに行つてと言うと、ヤコブは「いやだ、ヨハネが行けばいいのだ」と言っていたかもしれません。どうやって誰が聞きに行くかを決めたかはわかりませんが、聖書によると弟子のひとりがイエスのもとに来て、「祈り方を教えてください」と言いました。これは福音書の中で、弟子たちがイエスに何かのやり方を教えてほしいと言った唯一の個所です。彼らは、奇跡の行い方や長生きの仕方を教えてほしいとは言いませんでした。弟子たちは、祈り方を教えてくださいとイエスに願いました。彼らはイエスとともに過ごす中で、祈りが大事であることを学びました。祈りが欠かすことのできない人生の一部であるとわかっていたのです。それで、専門家のもとに行きました。こうしてイエスは弟子たちに祈りを教えることになります。イエスが教えられた祈りは、ただそれを暗記して復唱するためのものではありません。弟子たちに、そして私たちに与えられたこの祈りは、祈りの模範なのです。教会の礼拝でこの祈りが使われる際、多くの場合は毎週ただ復唱するだけになってしまっています。けれども、イエスはそのようなことを望んではおられませんでした。

では、マタイ 6 : 5-8 でイエスが何と言っておられるか読んでみましょう。「6:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。 6:6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。 6:7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。 6:8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」

この個所でイエスは、同じ言葉をただ繰り返してはいけないと注意なさいます。決まり文句を呪文のように唱えるのはよくないというわけです。ただ復唱するだけでは、そうなります。心のこもらない単なるセリフになります。クリスチャンにとって、祈りはしてもしなくてもよいものではありません。イエスはルカ 11 : 2 で弟子たちに「祈るときには」とおっしゃいました。イエスが弟子たちに祈るよう命じておられるのは明らかです。私たちもイエスに従う者ですから、弟子に含まれます。ではこれから、主の祈りを詳しく学んでいきましょう。

この祈りの一番最初の言葉は「父よ」です。イエスの祈りはほとんどが父に向けられた祈りです。私たちはご人格をお持ちの愛に満ちた父に向かって祈るのです。神は、どこか遠くにいて私たちと関わりを持たない存在ではありません。人はクリスチャンになると、神の家族に迎え入れられます。そして、私たちが神を父と呼ぶことを神が望まれます。新約聖書で 70 回以上も祈りの中でイエスが神を父と呼んでいるのですから、父と子の関係性を明らかにしておられます。イエスが神を父と呼ばなかったのは、十字架上で、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と祈られたときだけです。イエスが背負われた罪が、イエスと父を引き離し、父と子の関係が壊されました。私たちが祈るときも、御父に向けて祈るべきです。父を指す

アラム語の単語は「アバ」です。これは「パパ」という意味です。ここに、神との深い絆が表されています。また、子どものように神を信じる信仰も表します。神に父と呼びかけることで、祈る時に難しい教会用語を使う必要がないことがわかります。皆さんは父親と話すときに辞書に載っているけれども日常会話には使わないような難しい単語を使いますか。そんなことはしません。普通の会話をします。祈る時にもそうあることを神は望まれます。私たちがただ神に話しかけることを神は望まれます。皆さんにお勧めします。天の父に話しかけることから始めてください。言うべきこととそうでないことがあるからとか、言葉遣いや内容がちゃんとしているかなどと気にする必要はありません。神は、あなたとの会話を求めておられます。

イエスが、父に向かって祈るよう弟子たちに教えられると、次に「御名があがめられますように。」とおっしゃいました。イエスはまず私たちが神を父として認識するように教えられましたが、次に、神を聖なるお方だと認識しなければならないとおっしゃいます。「御名があがめられますように。」はなかなか理解するのが難しいフレーズです。このメッセージを準備していたとき、ある牧師のこのフレーズについての見解を読みました。そこにはこうありました。「御名があがめられますようにと祈るのは、身勝手な祈りをしないための予防策です。」つまり、私たちがこう祈って、心からそういう姿勢で祈るなら、祈りの中で神を第一とすることでしょ。自分中心の祈りや願いをする代わりに、神を中心とした祈りをすることができます。では、御名をあがめるとはいったいどういうことでしょうか。このあがめるという言葉は神聖なものとするという意味で、聖書の中ではふたつの意味があります。ひとつは、平凡なものを何かすばらしいものといっしょにすることですばらしいものとするという意味です。私たちクリスチャンはこのようにして聖なるものとされました。私たちは平凡な人間ですが、クリスチャンになると神のものとなります。神はすばらしく聖なるお方ですから、神と触れることで私たちも聖なるものとされます。ふたつめは、ある物や人を特別にとっておかれたものとして扱うという意味です。神の御名と神ご自身は特別ですから、聖なるものに対する敬意をもって扱う必要があります。神の御名をあがめることで、私たちは神の御名をみだりに軽く扱うことがないようにできます。神の御名は聖なるものですから、聖なるものとして扱われなければなりません。ですから、クリスチャンが「オーマゴッド」と言うのを聞くとあまりいい気分がしません。驚いたことを表現するのに神の名を使うのは、神の聖なるご性質についての認識に欠けていると思うからです。神の御名をあがめるといのは、神の神聖さを祈りの中で言い表すことにとどまりません。私たちは、神の神聖さを反映した生き方をする必要があります。神に完全に従って生きるのです。そうすれば、神の神聖さをこの世に届けることができるでしょう。皆さんにお伺いします。私たちが祈るとき、神にふさわしい畏敬の念をもって神の御前に出ているでしょうか。私たちの生き方は神に栄光を帰しているでしょうか。

次のフレーズは、「御国が来ますように。」です。ここにはキーワードがあります。皆さんにお聞きしますので、手を挙げて答えてください。キーワードが「御」だと思える人はいますか。キーワードが「国」だと思える人はいますか。キーワードが「来ます」だと思える人はいますか。ここでのキーワードは「御」です。正解者には、賞が天国に用意されています。ここで大切なのは、私たちの国ではなく、神の国が来るように祈ることです。つまり、「私の願うこと」をしてくださいと神に祈ることではないのです。私たちの思いどおりのことを神にさせようとするのではなく、むしろ、神のみこころに私たちの人生を合わせていくのです。祈りは、自分のライフプランを神に知らせることではありません。神に向かって、「火曜日の私の予定はこうだけど、神様もいっしょに来たかったら来ていいよ」ということではないのです。私たちが自分の計画を神に伝えるより、むしろ、神のご計画を私たちの人生の中で成就してくださいと頼むのが祈りです。多くの人は、「御国」の意味がわからなくて困るようです。国と聞くとすぐにお城と領地を持つ

た王さまを想像してしまうようです。イエスには国がありますし、その国はいつかやってきますが、この個所の国は地上の国を指しません。イエスはマタイ 6:10 で「御国が来ますように」に続けて、「みこころが天で行われるように地でも行われますように。」とおっしゃいました。御国とみこころという部分は、神が私たちの人生を支配されることを意味します。つまり、私たちの生き方も心の中も神が支配してくださるようにと祈っているのです。生き方でも考え方でも神を第一にするという意味です。私たち自身の喜びや楽しみよりも神の喜びや楽しみを優先させたいと願うことです。今週、皆さんが祈るとき、神のみこころが生活の中でなされるように祈ってみてください。また、神が心を開いてくださり、神のみこころをすることができるようにと祈ってみてください。神をまだ知らない人の心も神が治めてくださるようにと祈ってください。祈りの中で私たちが神を第一とすれば、生活の中でも神を第一とするようになると私は強く信じています。

では次にルカ 11:3 です。この祈りはここから焦点が変わります。祈りの前半の焦点は神でした。祈りの後半では、私たちのことが焦点となります。まず神に感謝し、神の神聖さを認識し、神のみこころが私たちの人生に行われるようにと祈って初めて、私たちの必要について祈り始めるのです。イエスはこう祈るように教えておられます。

「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。」日ごとの糧とは、食糧のみを指すのではありませんが、イエスがこの祈りをなされた当時、人々は実際の食糧だと理解したでしょう。当時は毎日食べ物を手に入れる必要があったからです。もちろん食糧も含まれますが、それ以上に、日常の必要について私たちが祈ることを神は望まれます。私たちの日ごとの糧を毎日お与えくださいと祈るとき、私たちが神に頼っており、神から与えてもらう必要があることを認めていることとなります。自力ですべてをしようとしません。自分の能力や職業が必要を満たしてくれるとは考えません。もちろん、能力や職業を用いて神があなたの必要を与えてくださっているかもしれませんが、その仕事を与えてくださったのも神であることを私たちは心得る必要があります。あなたの必要を満たしてくれる仕事は神から与えられたのです。神に日常の必要を与えてくださいと祈るのは、神が毎日私たちの面倒を見てくださるという信頼を示します。神が毎日の生活で私たちの世話をしてくださると認めていることとなります。私たちは本当にそうしているでしょうか。私たちは、毎日の必要を神に求める祈りをしているでしょうか。むしろ、日常の願望について祈っていないでしょうか。日常の物質的な必要を神が満たしてくださるようにとことさらに祈っていますか。少なくとも、神が与えてくださったものを祈りの中で感謝していますか。光熱費が払えるように助けてくださいと私たちが毎日祈ることを神は望んでおられます。光熱費の支払い日まで放っておいて、お金がなければ神が奇跡を起こして払えるようにしてくださるよう祈るというようなことを、神は望まれません。

皆さん、自分の心に手を置いてしっかり聞いてみてください。「神が必要を与え、私の面倒を見てくださるようには私は本当に祈っているだろうか。私の必要を神が与えてくださると私は本当に信じているだろうか。」神に日常の必要を頼らないと、傲慢という問題が生じます。私たちは傲慢になると、自分で何でもできると思ってしまう。「ささいなこと」は神に面倒見ってもらう必要はないと思うようになります。衣食住について神に与えてくださいと祈る必要性を感じなくなります。自分で何とかかなると思うからです。まるで神に向かって、「そういうことは自分でできるので神様は世の中のもっと大きな問題を片付けてください」と言っているようなものです。このような考え方だと、神への信頼が徐々に損なわれていき、ついには私たちの生活に神など必要ないと思うまでに至ります。日常の必要を与えてくださいと神に求めましょう。神はあなたが祈るのを待っておられます。

この世で最大のニーズとは何でしょう。ヒントは、昔も今も変わらないものです。飢餓でも、戦争でもありません。就職難や低所得でもありません。ホームレスのための家でもありません。この世の最大のニーズは、罪の赦しです。こういうわけでイエスは、ルカ 11:4 でこうおっしゃいました。「11:4 私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』」 日常の必要を与えてくださいと祈った後で、私たちは罪の赦しを神に求める必要があります。神のみが私たちの罪を赦すことができになります。私たちの罪を赦し、罪の罰を免除することができるのは神だけです。私たちの心を洗いきよめて新しくすることができるのは神だけです。神は罪の赦しを提供されますが、私たちはそれを与えてくださいと神に求めなければなりません。私たちは毎日罪を犯します。クリスチャンであっても、私たちは過ちや罪を犯します。イエスがここで言うておられるのは、私たちには毎日神に罪を告白する必要があるということです。私たちが神に罪を告白しないと、積もり積もって山となり、神と私たちを隔てる壁となってしまいます。罪が神と私たちの関係を邪魔します。私たちにはその壁を壊すことができません。神にごめんなさいと言うまでは、どんなことをしてもその壁は崩れません。その壁が取り去られるのは赦しによってのみです。赦しは、私たちが求めた時に神から与えられるものです。ヨハネ第一 1:19 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」ヨハネはこの個所で、神は真実だから罪を赦してくださると言います。クリスチャンの中には、これがどうも理解できないという人がいます。人はクリスチャンになると、罪を赦されますが、完璧にはなりません。罪と葛藤する部分が誰にもあって、罪を犯してしまいます。神は恵み深いお方ですから、私たちが赦しを求めれば赦してくださいます。私たちが罪を犯しても、救いを失うことはありませんが、神との関係に傷をつけたことになりますから、修復する必要があります。

次にイエスがおっしゃったことに注目してください。神に赦しを求めたら、他人のことも赦さなければならぬとイエスはおっしゃいます。赦しをいただきながら、赦しを与えないわけにはいきません。神の赦しをいただくなら、私たちも他の人を赦さなければなりません。他の人を赦したくないのに、神に赦しを求めるのは間違っています。イエスは、マタイ 18:21-25 だと話をなさいます。今ここではその個所を読みませんので、ご自分でいつか読んでみてください。このたとえ話は、王に多額の借金をしていたしもべについてです。現代の価値になおすと 7,200 億円相当です。このしもべは、一生かかっても返済できないほどの借金をしていました。王はこの男と妻子を奴隷として売ろうとしました。しもべは赦しを請い、王が赦して借金を免除して下さるよう頼みました。次の日、このしもべは彼に借金のある別のしもべを見つけました。しもべが王に借りていた額に比べれば、取るに足らない金額です。しかしこのしもべはもうひとりの首を絞めつけて、金を返せと怒鳴りました。金を借りていたしもべは赦してほしいと頼みましたが、先に王に赦してもらったしもべは同僚のしもべを赦そうとせず、牢屋に放り込みました。私たちが他の人を赦すようにとイエスはおっしゃいます。今日、皆さんには赦すべき人がいますか。礼拝が終わったらその人を見つけて、赦してあげてください。自分のことを振り返ってみてください。誰かを赦す必要がありませんか。または、誰かを傷つけてしまって、その人に赦しを求めなければならぬようなことはありませんか。今日が皆さんにとって、赦しの日となりますように。

最後の祈りのフレーズは、「私たちを試みに会わせないでください。」です。私たちは墮落した世界に生きていることを自覚していなければなりません。私たちと神との関係を邪魔しようと働く力があります。それが誘惑というかたちでやってくる場合もあります。自力で誘惑と対峙できる強さは私たちにはありません。神によって誘惑から守っていただく必要があります。私

たちが試練や誘惑に遭うとき、神は私たちを助けたいと思ってくださいます。コリント第一 10 : 13 にあるとおりです。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」神は誘惑から脱出する道を備えてくださいます。そう思うと、安心です。私たちが誘惑を受けても、神が脱出の道を用意してくださるのです。誘惑に遭うと、どうやって抵抗すればよいのかわからないことがよくあります。そんなとき、私たちは目を開いて神が与えてくださった脱出の方法を探さなければなりません。そこで問題になるのが、私たちが神にしっかり目を向けているかということです。そうでないと、神の与えてくださった道が見えないからです。私たちには常に選択肢が与えられています。罪を犯す選択肢ばかりではありません。必ず正しい選択肢があるはずです。何が正しくて何が間違っているかを見分けられるよう、しっかり神に目を向けましょう。神の守りを祈りましょう。神の武具をつけて、守りを固める必要があります。

最後に、皆さんの祈りのひな型として、この祈りを活用することをお勧めします。天の御父に話しかけてください。神のみこころが皆さんの人生でなされるようにしてください。必要を与えてくださるよう神に頼んでください。誘惑から守ってくださるよう神にお願いしましょう。そして神に赦しを求めましょう。赦さなければならない人や謝罪しなければならない人がいれば、今日そうすることを真剣に考えてください。では祈りましょう。